

新芝浦工大像の礎石はなにか

教授会の少数意見・10

浅野利昭

昨年一二月一〇日、芝浦工業大学教授会は全学闘争委員会の公開質問状に対し、四三年度学費値上げ白紙撤回は是、一一項目要求には条件付き是の回答をしながらも、バリケードストライキ支持については賛成二人を除いて全員、否の回答を出した。以下の文は、バリケードストライキを支持した者のひとりとして、学生たちが築いたバリケードの正当性を、闘争の事実経過そのものを通じてあきらかにするために書いたものである。

1・31暴力事件の啓示

昨年一月以前の芝浦工大は、工科系大学の常として、年に一度の定期学生大会もほとんど定足数に達せず廻会となるといつた、およそ学生運動や政治活動とは無縁な無風地帯であった。昨年一月、後期試験の始める二週間前に、理事会・評議員会によって一方的に決定・発表され、四三年度以降の入学者を対象とする学費の大額な値上げに対しても、反対運

動はほとんど火を吹かず、そのまま終息するかにみえたが、この状況を一挙に逆転させたのは一月三一日の「学費値上げに關する」臨時学生大会であった。大宮校舎の体育館でおこなわれたこの学生大会で、値上げ賛成派の運動部員による暴力事件が発生したのである。しかも圧倒的多数の支持を得て選出された議長のもとで經理公開、値上げ白紙撤回等が決議された後、委任状をめぐる疑惑から自治会執行部がこれらの決議のみならず、学生大会そのものの無効を宣して退場するに及んで、日ごろ劣悪な教育環境のなかでのマスプロ教育と抑圧にそのはけ口さえ見出せなかつた学生たちの不満は一挙に爆発した。

この不満の本質が何であったかは、大宮校舎直後にあるふくれあがつた渦巻デモのシュブレヒコールが「暴力反対」「自治会反対」、「値上げ反対・白紙撤回」の順序であったことがよく物語っている。ところが当然暴力事件の調査とその責任を追及すべき学生部長（体

育教室に所属する教授で元ハンドボール部監督）はまったく大宮校舎に姿を現わさず、かえって三日後に「学生の一部に、かねて申請していた」という声明を教養部長と連名で出すにいたつて、学生たちの不満は深刻な疑惑に変つていった。二月六日、試験の合間におこなわれた二月六日、試験の合間におこなわれた投票は、大宮在籍学生数三〇六二人、有効投票数二四三六票中、スト支持一六九一、反対七四五という記録的な数字を示した。それでも七日、八日の生大会そのものの無効を宣して退場するに及んで、日ごろ劣悪な教育環境のなかでのマスプロ教育と抑圧にそのはけ口さえ見出せなかつた学生たちの不満は一挙に爆発した。

その後舞台は田町校舎に移り、学生たちは1・31暴力事件の追及、經理公開、値上げ白紙撤回を求めて学長会見を要求

したが、事態はいっこうに進展せず、ようやく教授団の斡旋によつて入試の前日、二月一九日の午前一〇時四〇分ごろ

表1 42年度損益計算書

(43年3月末)	
収入の部(万円)	支出の部(万円)
授業料等 67173	人件費 46969
雑収入等 41499	物件費 9388
入学金等 55088	雜件費 11858
助成金 5652	計 68215
計 169412	取支差 101197
収支差の使途	
別途積立金繰入	4350
償却費(建物・機器等)	28550
退職手当引当金繰入	3000
積立金繰入	65295
計	101195

表2 雜費明細の一部

(補助金・元帳より任意) (抽出100円以下切捨)	
月 日	体育諸費
4・21	バスケット部 200
*	ハンドボール部 700
26	野球部 661
5・15	野球部 91
16	野球部 220
18	野球部 195
6・7	野球部 220
7・11	野球部 650
27	野球部 800
*	バスケット部 300
9・9	野球部 700
10・2	野球部 600
11	野球部 214
12・25	野球部 500
月 日	野球部 2005
2・22	仮処分執行費用、東京地裁 365
3・11	学生運動対策諸費、警備料 2160
	総合書類保障
3・30	学生運動対策食料費、学生部長級学生食料、のんき 363
*	学生運動対策諸費用、H部長級、東急国際ホテル 449
	T学生部長級各所支払分 347
	M理事級各所支払分 1451

追及と経理内容の公開がいつこうに果されず、ようやく五月末、さきの学長会見を開催のための条件であった「一月三一日暴力事件調査遅延の責任を明らかにし、適切な処置をとること」の内実が、病気を理由とした前学生部長の一年間の欠勤届に変身するに至っては、民主化の前途に暗雲をみないわけにはいかなかつた。一方、教授会はそれ自身の確立が民主化要求一五項目のひとつであるという戯画的状況におかれていながら、七月はじめ、助教授をその構成メンバーに加えることによって民主化の体裁を整えた。

学長の諸問題たる地位にみずから甘んじ、なんら闘う姿勢を示さなかつたことは、1・31暴力事件を生みだした芝浦工大アンシャン・レジームの体質をそれ自身が形づくっていたことの何よりの証拠ではなかつたか。こればくたち若手にとっても同様であつた。しかしこのことが真に自覚されるにはまだ時を必要とした。夏休みを返上して教授会のなしえたことは、要するに制度の改革以外の何ものでもなかつたのである。

追及と経理内容の公開がいつこうに果されず、ようやく五月末、さきの学長会見を開催のための条件であった「一月三一日暴力事件調査遅延の責任を明らかにし、適切な処置をとること」の内実が、病気を理由とした前学生部長の一年間の欠勤届に変身するに至っては、民主化の前途に暗雲をみないわけにはいかなかつた。

一方、教授会はそれ自身の確立が民主化要求一五項目のひとつであるという戯画的状況におかれていながら、七月はじめ、助教授をその構成メンバーに加えることによって民主化の体裁を整えた。

こうして肝心のことが何一つ解決されぬ全學協議会、制度改革に熱中する教授会をよそに、学生たちにとつては「ながく暑い夏」がはてしなく続いていたが、九月はじめ学長兼理事長が、責任をとつての辞職ではなく病気のために辞任すると、教授会は決定的な過ちを犯すことになる。それは後任の学長代行を選出するに際して、一方では理事会に、他方では学生および教授会員以外の教職員に、なぜ学長ではなく学長代行を選出しなければならぬかを、学長公選規定とそれを裏づける寄付行為(大学定款)の未改定を論拠として延々と説明し、しかも候補者として擬せられる教授がいずれも民主化を託すに足る人物であるとまで断言しながら、いざフタをあけてみると、人も

これまでにも教授会に対して漠然とした不信を抱いていた学生たちにとって、これはあまりにも大きな裏切りであつた。二月以来八カ月、学園の民主化を目指して歩んできた末に立たされたのがこの絶望の淵であつてみれば、もはや信じばならぬかを、学長公選規定とそれを裏づける寄付行為(大学定款)の未改定を

論拠として延々と説明し、しかも候補者として擬せられる教授がいずれも民主化を託すに足る人物であるとまで断言しながら、いざフタをあけてみると、人も

あろうにさきの学費値上げの責任者であり、芝浦工大アンシャン・レジームを支えれる強力な柱であった現職の理事の一人を選出してしまつたのである。当の理事は翌日辞退を表明し、ぼくたちはこれまで、要するに制度の改革以外の何ものでもなかつたのである。

白日のうちにさらされた教授会そのもののもつ本質は、もはやおおべくもなかつた。

绝望の淵の学生たち

これまでにも教授会に対する漠然とした不信を抱いていた学生たちにとって、これはあまりにも大きな裏切りであつた。二月以来八カ月、学園の民主化を目指して歩んできた末に立たされたのがこの絶望の淵であつてみれば、もはや信じばならぬかを、学長公選規定とそれを裏づける寄付行為(大学定款)の未改定を

論拠として延々と説明し、しかも候補者として擬せられる教授がいずれも民主化を託すに足る人物であるとまで断言しながら、いざフタをあけてみると、人も

あろうにさきの学費値上げの責任者であり、芝浦工大アンシャン・レジームを支えれる強力な柱であった現職の理事の一人を選出してしまつたのである。当の理事は翌日辞退を表明し、ぼくたちはこれまで、要するに制度の改革以外の何ものでもなかつたのである。

この日の大衆団交の席上で理事会は「経理の即時全面公開」を学生の指定する公認会計士のもとで実施するという確約をしたのである。二月二〇日以来、実際に二六九日目のことであった。この確約にもとづいて三日後に公開された経理内

学生たち、ことに値上げの直接の被害者である一年生は、自治会執行部の指導性をのりこえて、激しく「値上げ白紙撤回」を要求し、「かえせ、かえせ」のシユブリコールは体育館をゆるがせたが、理事側はガンとして譲らず「値下げは絶対にできない。値下げをすれば学校がぶぶれる」とくりかえすばかりであった。午後一〇時半、学生たちはやむなく団交の決裂を確認して、ストライキを宣言した。すると理事側はさきに認めた一

一項目をすべて撤回する、と宣告して引揚げてしまつたのである。学生たちはただちに抗議集会を開いた。そして全学バリケード封鎖という強硬手段で、白紙撤回と一一項目要求を闘いとする決意を固め、闘う主体の結集である全学闘争委員会を結成した。

ぼくは団交の一部始終を見守っていたが、事態の急転に茫然とした。しかしむろん抗議集会に参加する立場にはなかつたので、顔見知りの諸君とともに五階の製図室に集り、一体ことの本質は何であるのかを話しあつた。議論は堂々めぐりをして果てしなく続いたが、そのうちバリケードを築く音が中庭に反響し始めたので、このままでは自動的にバリケードのなかに入ることになるから、ともかく外に出ようということになつた。ぼくたちは赤や白のヘルメットをかぶつた学生たちの苦渋にみちた視線を背後に感じながら、バリケードの外に出た。

模索する教授会

一方、大学当局は学長代行名で全教職員を学外の旅館に招集し「全学一致して事態の收拾にある」とことが要請され、さしあたり経理検討委員会を結成して、

ろめたさを感じ始めた教職員は、「紛争収拾」の手段として機動隊を導入しないことを、この最初の会合で確認し、理事会に申入れた。

この日以後、連日会合がもたれ、やがて個人加盟による教職員協議会が結成された。教授会メンバーもその大部分が教職協に登録し、教授会と協議会が交互に開かれるといった状態だったが、そのいずれにおいてもバリケード・アレルギーは支配的で「白紙撤回」すらほとんど口にされぬありさまだつた。しかし真実の前には虚偽は次第に色あせてくる。一二月にはいり、会合の場所が芝増上寺の黒リケードを築く音が中庭に反響し始めたので、このままでは自動的にバリケードのなかに入ることになるから、ともかく外に出ようということになつた。ぼくたちは赤や白のヘルメットをかぶつた学生たちの苦渋にみちた視線を背後に感じながら、バリケードの外に出た。

本尊本堂に移されたところから、事態は徐々に、しかし確実に動き始めた。田町校舎にバリケードが築かれて一〇日目、大宮校舎が、さきに深夜新宿まで歩いた学生たちの大半を含む学生たちの手でバリケード封鎖されて七日目に、これまでの教授会の体質からは想像できないような声明書が、出席者全員の一一致で採択された。それは本質的な点では、依然として問題を含みながら、ともかくも根本的な解決への方向を模索しようとするものであった。

一 本年二月の紛争以来、一〇カ月近くを経て今日、当時より痛感された本学園の民主化、近代化は決して充分には進展していないことを、われわれ教授会は認めざるを得ない。このことについて少くとも力を持つものではなかつた。そして第一次闘争の収束に、漠然とではあるがうし

くに経理の公開について、教授会としてその実現に積極的な努力を欠いたことは否定できないところであり、また学長代行候補者に在來の理事を選出したことは、われわれの認識の不足を示すもので、深く自己批判するものである。これらの反省の上にたつて今日、われわれは新たな決意のもとに学園の民主化、近代化に取組まねばならぬと考える。

二 二月十九日以来われわれは、学園の民主化、近代化を推進する過程において理事会との接触、交渉を行つて来たが、それを通じてわれわれは理事会の二月の紛争にかかる理事のもとでは学園の民主化、近代化の実現は全く期待しないと考え、現理事全員に対して不信任の意を表明し、同時に辞職の実現を要求するものである。それと同時に今までの理事の責任についても徹底的に追求する権利を留保するものである。

三 われわれ教授会は今春の学費値上げに対しても「値上げ止むを得ず」との理事の説明をうのみにし、二月の時点において妥当と認め、その正当性について追求しなかつた過ちを深く自己批判するものであり、新しい大学像と明確な経理公開とを伴わない不確定要素の上にたつた本年二月の学費値上げは、今日いつたん白紙に還元すべきであり経理内容の全学的規模での再検討を経て決定すべきであると考える。

五 われわれ教授会は新しい芝浦工業大学像を確立することが急務であるが、これは教授会員のみでなく、全教職員によって行なわれ、学生諸君と協議のうえ決定すべきであると信じ、すでに教授会員を含めて発足した芝浦工業大学教職員協議会において採択し、全学に提案される新芝浦工業大

学像をもつてわれわれの提案とするものである。

昭和四三年二月二日

芝浦工業大学教授会

痛みなき「暴力」批判

しかしながら、この声明にみられる自己批判とは、一体どのような内実をともなうものであつただろうか。ともかくも満場一致で承認され、ぼく自身その場に



コンピュータを
初めて学ぼうとする
人のための入門書！

総合目録室『ジャーナル
で見たと明記の上、ハガキ
でお申込みください。

竹下重著『プログラミングの基本論理からプログラミングの最新版
までを説きすすめた最新版
980円

大林久人著『C O B O L の基礎知識を学生・実務家のためにつく
C O B O L の基本と応用を詳述
950円

ケイエイ

日本経営出版会
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-18-21
振替東京 48585

やさしいプログラミング 最新プログラミング入門

C O B O L 演習 基本と システム・デザイン入門

ケイエイ

日本経営出版会
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-18-21
振替東京 48585



居あわせたのであるから、さらにいえられたままである。

ば、三の「その正当性について追求しなかつたことは」という表現を「追求しなかつた過ちを」と訂正するよう要求したのであるから、この声明の一言半句に全面的な責任を、ぼく自身も有することは

いまだもない。したがってこれからもこの声明は、だれよりもまずぼく自身に向けられている、ということを確認しておきたい。

一、さきの民主化一五項目の要求が、経理の公開と一月三一日の暴力事件の追及にあることはすでに述べたが、この後者について声明は一言もふれていない。

このことは、在來の理事を学長代行に選出した教授会の体質を、ふたたび露呈したことではなくて何であろうか。くさいものにはふたをするといふ事なれ主義は、依然として健在なのである。前学生部長の教授職に対する辞職勧告が決議されたのは、ようやく一二月二七日のことであり、しかも現在なおその勧告は拒否

されながら、第一次闘争以前に何ら闘う姿勢を示さず、そのことによつて理事会の支配体制を、主観的意図は何であれ、客観的には支えていたのだといふ自覚がないまでもない。この自覚が、痛苦をともなつてなされない限り、「学生諸君の……具体的な要求については正確に知りえていないが」などといふ他人事のような表現が跡をたたないのである。

三、2・19の収束が、まさに欺瞞的な収束であり、その収束を斡旋した当事者である教員は、たんにそのマヌケさ加減だけではなく、ほかならぬ教員としての倫理性こそが問われているにもかかわらず、そのことの自覺が希薄であるために「白紙に還元」という曖昧な表現がなされた。この点は学生たちが、この声明のなかでもっとも問題にした点である。自己批判の内実が真にみずから肺腑をえぐるものであれば、当然「白紙撤回」で

されただけのようになつてしまつたが、もしもいわゆる「大学法案」がすでに成立していたとすれば、一体どういふことになつていただろうか。ただ封鎖、占拠という現象面にのみ視野を限定することによって、問題の本質は一切隠蔽されたまま、闘争そのものが圧殺され

さすのであって、Gewalt といふドイツ語を辞書でひくと、まず「権力」という語がさきに出でることを付記しておこう。

以上の諸点をふまえたとき、この声明のもつ曖昧さはあきらかであろう。当石が据えられることを知らねばならない。まことに「破壊は学生諸君の仕事だ」といふほど恥知らずな教授会ではありたくない。にもかかわらず、この声明が出される時点では「バリケードは理事会に向けられているのだから」といった無責任な言ふべきではない。

さてはなはだ大難把な、しかも昨年一月二〇日までの経過をあわただしくたゞつただけのようなことになつてしまつたが、もしもいわゆる「大学法案」がすでに成立していたとすれば、一体どういふことになつていただろうか。ただ封鎖、占拠という現象面にのみ視野を限定することによって、問題の本質は一切隠蔽されたまま、闘争そのものが圧殺され

(あさの としあき・芝浦工大助教授)